

平城京羅城門跡現地説明会資料

1972.3.11

大和郡山市教育委員会
奈良国立文化財研究所

1. 発掘遺構概要

今回の調査は、昭和47年2月から3月にかけて、平城京羅城門の本体とそれととりつけたと予想される羅城の遺構を明らかにするために実施した。

発掘区は朱雀大路が九条大路につき当たり、平城京羅城門の跡に乗り出していると地形上推定される部分である。すなわち、秋篠川にかかる来生橋西側土守下の金魚池両半972㎡で、地割は大和郡山市麗音寺町114-1、114-3である。

今回の調査は第3次にあたる。第1次調査は、昭和44年7月～8月、秋篠川東側で行なったが、氾濫により羅城の遺構は発掘できなかつた。第2次の調査は、昭和45年3月～4月、秋篠川西側で行ない、来生橋西200㎡で東の南端の遺構、羅城外の溝、羅城門の跡、朱雀大路西側築地と側溝、九条大路北側築地とその側溝などを発掘している。

今回の調査で検出した遺構は、羅城門の基壇の西端3m、朱雀大路の西側溝延長部分、暗渠などである。

羅城門の基壇西端部：基壇のつみ土は版築で、上からバラス・栗褐色土・バラス・唐褐色粘質土・バラス・黒褐色粘質土を交互に敷いている。基壇に柱は検出できなかつたが、基壇付近で凝灰岩の小塊を発見している。基壇周辺み地業は調査途中のため未確認である。昭和40年の来生橋改修の際、秋篠川西側の川床より花崗岩質の長方形の礎石が4個（このうち1個は房層敷）発見されているが、今回の発掘区には礎石、根石などはさらに東側へ拡張して調査しないと検出できない。なる、今回検出した基壇上面と川床の礎石の上面との比高差は約2mある。

基壇の規模は、朱雀大路の幅を28丈（約84m）と仮定すると、昭和45年度

と今回の発掘結果より、東西36m、南北19mと考えられる。したがって、この基壇の上に建つ羅城門は、5間×2間（18m寄間）の空堀り門であると推定する。

朱雀大路の西側溝延長部分：これは羅城門基壇西端より西へ15mのところであり、昭和45年度の調査のとき検出された朱雀大路西側築地側溝につながり、側溝は幅上端で5.3m、下端で3.1m、深さ1mある。北側では扇形に広がっている。溝の中には護岸のために使われたと思われる石（約40cm×50cm）が24個埋ち込んでいた。溝の上層は黒褐色粘土、下層は灰色砂である。この側溝は羅城の下を通りぬけ城外の溝に注ぐものと考えられる。

暗渠：側溝の西端よりさらに西へ3.6mのところであり、幅90cm、深さ40cmで、側溝にそって南北に走る溝状遺構がある。溝中の泥土は黒褐色粘土である。溝底は側溝底より高く、北から南に向かって低くなっている。この溝は本館の暗渠の掘り方と思われる。

羅城門にとりついていたと考えられる羅城（築地）の痕跡は今回の調査では発見できなかった。

2. 出土遺物

遺物は主として朱雀大路西側溝の延長部分から出土した。主なものは瓦、土器、鉄貨などである。

瓦は6133、6304-L、6306、6316-Dの4種、軒平瓦は6604、6721の2種がある。土器は須恵器、土師器が主で、なかに人面を2個前に騎いた土師の壺がある。このほか、和風調茶巾敷、帯金具2点、釘1点が出土している。なる、比較的時代の新しいものとして、幅3mの東側溝中より曲物側板・底板、漆塗の椀、径60cmの桶が出土した。また、西側溝の黒褐色粘土下より、永徳一淳化元寶・建永通寶・至和元寶・嘉祐通寶・同安元寶・元符通寶・政和通寶、金貨一正暦元寶、銅貨一永樂通寶などが出土した。

